**意思伝達が苦手な障がい者のアセスメントと評価　第3回「ニーズ把握の困難な利用者へのアセスメント」01190803wtj**

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| シート＃ | シートタイトル | 小見出し | 要点　「」はテロップ |
| P1  左下 | 利用者意向の分かりづらさ |  | 利用者意向の分かりづらさは、発達の程度、知的なレベル、自閉症や発達障がいが背景にわることはわかるが、「なぜそうなっているのか？ということを分析していくためには、アセスメントは欠かせない」ものになってくる。 |
| P1  右下 | なぜ強度行動障がいになるのか？ |  | 障がい特性と環境要因が強度行動障がいをつくっていく。  物理的な環境、支援者、その他の人、状況などがいろんな形で混ざり合う。 |
| （左側） | 情報が偏ったり、わかりにくかったり、独特な形で入ってくるのが、この障がいの特徴。わからないの積み重ねが了解されないままに、本人の中に培われていく。 |
| （右側） | それをコミュニケーションとして不安であることが言えない。伝えたいことを言葉ではない、独特の表現やパニックや情動行動などの行動で伝えようとする。  伝わらない積み重ねが増す。 |
|  | そして、支援者や地域を取り巻く人々との関係の中でうまくいかず、トラブルになり、問題行動としてとらえられてしまう。本来であれば彼らが困った人たちで、私たちはそれを支援しなければいけないが、結局本人に問題が帰されてしまい、人や場に対する嫌悪感や不信感を彼らが持っていることになる。 |
| P2  左上 | 氷山モデル |  | 自閉症、強度行動障がいの根底にあるもの、障がい特性としては、社会性の発達の遅れ、想像することの困難性、コミュケーションの発達の違い、これら3つがあげられる。  これに彼ら独特の感覚刺激の感じ方や注意の向け方などが基底にあって、そのことが表面的に見えてくる行動として、判断能力がつかない、動機づけが弱い、自分の意志を示さない、パニックを起こしたり奇声をあげたり、止まらない情動行動などが表れてくる。  私たちは問題行動だけに目を向けて変えようとするが、根底にある、社会性の違い、想像の困難さ、コミュニケーションの違い、感覚刺激の感じ方、が大きく違う。例えば、プールの表面に映る水面の光の反射が刺激となって、目に痛いように飛び込んでくる。身体的な痛みとして感じる感覚を持つ方がいるが、私たちはそのことを理解しないままにプールの中に入れてしまおうとする。  そういう経験が積み重なってくると、当然、支援者に対する不安や恐怖、苦痛などがある。そして自分でも言葉としてしゃべれないことの繰り返しの中で、自信を失い意思表出をすることを忘れ、何かあるとストレスや不安が自動的に情動行動になったり、パニックになったりしてくる。 |
|  | 私たちはこれを問題行動と決めつけるが、もう一度考えていただきたいのは、課題となっている行動が、本人の独特の障がい特性から生まれてきている・起因している。そして生育歴も含めた環境は物理的な環境もあるが、人為的な環境もある。  「支援者そのものが環境なので、支援者の関わり方が累積的に本人の障がい特性と合わさって、ミスマッチングを起こして行動を起こしている」。  必要なサポートは、「本人の障がい特性に合わせた、わかりやすい支援であると同時に、本人がわかりやすく安心ができる環境・状況を模索していく」ことになる。ここはまさしく、アセスメントの重要なところである。  そういう意味で、アセスメントは、「個人と環境の両方から、そして、個人と環境の相互作用の中から、課題となっている行動の必要なサポートを考えていく」ことになる。  問題行動や「個人だけに焦点がいくと、アセスメントは力を失う」。 |
| P2  右上 | 生活全般と生活場面における活動・課題のアセスメント |  | アセスメントは、生活全般と生活場面における活動・課題のアセスメント、この2つをうまく使い分けることが大事。 |
| 全体的なアセスメント  本人の障がいや特性 | 本人の障がい特性や、強み・弱みを探っていく。「本人ができることがたくさんあるので、それを探る。本人がとても嫌なこと・不安なことも探る」。 |
| 環境の特性 | そして人も含めた環境特性をきちんと探る。「本人にやさしい環境となっているのか？ということを探っていく」。 |
| チャレンジ行動に焦点化したアセスメント | 「「問題行動」とは言わず、「チャレンジ行動」と言いましょう。 |
| 機能的アセスメント | 環境との相互関係の中で本人の行動を考えていくことが大事になる。 |
| P2  左下 | ABC分析 |  | 機能的アセスメントの一つ。  私たちの行動は、先行事象、行動、結果という一連の流れの中で行われているととらえる。私たちは、B行動に注目してアセスメントしようとするが、その前に、Aどういった状況でB行動を引き起こしているかという、A先行事象に注目することが大事。  そして、そのA先行事象によって刺激を受けて、反応としてB行動をとり、そのC結果が学習されていって、生活を習慣化している（行動の随伴性）と考えて、ABC分析をとらえ、観察と記述の中でアセスメントしていくことをぜひやっていただきたい。 |
| P2  右下 | ストラテジーシート |  | 「ストラテジー」＝戦略・計画  望ましい行動をとってもらうために行動の修正をしていく。まず、A事前、B行動、C事後の具体的な観察した記述を書く。  そして、A事前の行動の対応を変えていくことによって、本来の求めている望ましい行動に変えていく。  そしてそれを強化しさらに促進するために、その行動がいいことだとほめたりする。  こういったことを表の中で表し、計画を立てる。この表そのものが、観察と記録によるアセスメントになっていく。 |
| P3  左上 | スキャッタープロット |  | 散布図と呼ばれている。  上に観察する行動の焦点を絞る。  掲示物を破く、トイレに物を流す、実際にやった日を●と★でしるしをつけていく。それがいつどこで行われたかを示す表。これにより「「見える化」をし、チーム全体で情報を共有し、なぜその時間帯に頻度が高く起こってくるのかを分析し、ストラテジーシートなどを使って仮説検証をしていく」。  「アセスメントはデータに基づいた根拠のある仮説検証をしていくプロセス」と言える。 |
| P3  右上 | 記録と評価＝原因を考える |  | アセスメントは、観察をし、記録をし、分析すること。  記録と評価を通じて、原因を考えることが、アセスメントの本質。 |
| 関連しそうな情報を集める | 関連しそうな、という意味は、「何を支援しようとしているのか？というところが明確になっていないと、アセスメントをするのもバラバラになってしまう」。 |
| ■障害特性やスキルをもう一度調べる | 私たちの理解が正しかったのかどうか。苦手なことをさせていないか、得意なことを活かしているのか、できること・できないことをちゃんと見ていたのかどうか、もう一度見直す。 |
| ■生活全体の状況を確認する | 施設の中だけを見ていても24時間の中での支援の状況を見ないとわからない。生活のパターンなどを見ていく。 |
| できているときできていないときの環境を詳しく見る | できている時・できていない時の環境、例外的なこともちゃんと見ながら、問題の生じた前後の状況を整理し、機能的なアセスメントなどを使い分析していく。 |
|  | 「「観察」・「記録」・「評価」これがアセスメントの重点になってくる」。 |
| P3  左下 | その他のアセスメント |  | 強度行動障がいやわかりづらい利用者の場合には、障がい特性をきちんとおさることが必要になる。これらのフォーマルな評価と呼ばれるものを使いながら分析していくことが必要になる。「障がい特性について理解していくことはとても大事なこと」だと思う。 |
| P3  右下 | 締めのひと言 | ●アセスメントの各シートは情報を焦点化するのに便利ですが、その枠組みにしか焦点が当たらない | アセスメントの各シートは情報を焦点化するのに便利だが、そのアセスメントはそのシートの中でしか機能しない。つまり、その「シートから外れる情報はたくさんあるので、併せて、シートに頼らず自分の支援の中で見ていく」。支援実践の中で仮説検証を繰り返し、情報を取りにいく姿勢が大事。 |